

近代ユダヤ史における東欧と西欧

——ハシディズムとハスカラーの歴史的評価に関して——

角 伸 明

ヨーロッパ史における18世紀から19世紀初頭の時代は、近世から近代への移行期に相当する時代であり、思想史上の啓蒙主義時代と呼ばれている。伝来の権威や偏見や俗信から脱皮し、自由で批判的な思想態度の確立と普及を目指す啓蒙主義は、反封建的な性格の思潮として現れ、旧制度下のフランスでは、とりわけブルジョワジーを中心に普及して、フランス革命の知的原因となった。この時代にフランスに現れたデイドローやヴォルテール、ドイツのカントやレッシング、ロシアのラディーシチェフなどは、いずれも啓蒙思想家の性格を持ち、なんらかの意味で専制主義や権威主義や既成宗教を批判している。また、プロイセンにはフリードリッヒ2世、オーストリアにはヨゼフ2世、ロシアにはエカテリーナ2世が現れ、啓蒙思想の影響の下、政治の合理化・国家の改造を目指した政策を実行し、啓蒙専制君主と呼ばれた。近代の成立史の上で普遍的意味を持つこの啓蒙期は、文化史的視点から見た場合、ルネサンスと宗教改革の次に現れた歴史を画する時代であるが、ユダヤ人にとっては、他の非ユダヤ人とは違った重要な意味を帯びた時代であると認められている。この点に関して、徳永恂氏は「ハスカラ（東欧啓蒙）の二面性について」という文章の中で、ほぼ次のように述べている。

ユダヤ人は、中世を通じて、イスラム圏に属する地中海世界で一貫して古典文化を継承保持してきたのであり、ルネサンス期にあらためて古典文化を再生したわけではなかった。また、ルネサンスはふつう中世の暗黒時代を打破したとされているが、ユダヤ人にとっては、14世紀以降の数世紀は、迫害・追放・ゲッター化といった文字通りの暗黒時代であり、ルネサンスは何ら新しい時代の始まりではなかった。宗教改革についても同じことが言える。プロテスタントがとくにユダヤ人に対して好意的だったわけではない。宗教改革は、それ自身としてではなく、たんに次の時代の信教の自由・宗教的寛容という理念一般を準備したかぎり、ユダヤ人にとって意味を持つにすぎない。このようにユダヤ人にとってはルネサンスや宗教改革は、時代区分上の意味をほとんど持たない。彼らにとって画期的意味を持ったのは、啓蒙期であった。啓蒙期こそは、文字通り暗黒時代を打破する「光のさし始め」であった。啓蒙期は、ユダヤ人にとっては、何よりもそれが「解放」の時期だった。種々の政治的・宗教的・経済的な制限立法からの解放であり、居住国の非ユダヤ市民との法的平等の獲得の時期だったのである。（徳永恂『ヴェニスにゲッターにて』p. 252-254）

このようにユダヤ人にとって画期的意味を持つとされる啓蒙時代、つまり18世紀に、西欧（特にドイツ）と東欧のユダヤ人社会は、それぞれハスカラーとハシディズムと呼ばれる社会的・宗教的運動に席卷された。西欧のユダヤ人社会に広まったハスカラーは、邦訳ではユダヤ啓蒙主義と呼ばれ、東欧のユダヤ人社会を席卷したハシディズムはユダヤ敬虔主義と呼ばれている。ユダ

ヤ啓蒙主義と呼ばれるハスカラーは、西欧社会全体に広まった啓蒙主義思潮の刺激を受けてユダヤ人社会内部に生まれた啓蒙運動であるとされているが、ユダヤ人社会の伝統的な生活習慣や知識、伝統的なものの考え方の枠から抜け出て、非ユダヤ的知識と教養を身につけ、自由に思考し、行動することで、積極的に非ユダヤ人社会に適応しようとする運動である。これはユダヤ人自身が築いていた文化的ゲッターから出ていくことであり、そうすることによってユダヤ人が置かれていた惨めな境遇から脱することを目指した運動であった。一方、東欧のユダヤ人社会に遼原の火のごとく広まったハシディズムは、ユダヤ神秘主義（カバラー）の流れを汲む宗教運動であり、偽メシヤ出現によって破壊された民衆の信仰を復興する運動であった。神を礼拝する喜びを強調し、日常生活の隅々にまで神との交わりがあること教え、あらゆることに積極的に人間が参与することによって神との交わりが実現され、恩恵が与えられると説いた実践的・生活的宗教運動であった。そして、終末論的な世界の救済よりも、差別と迫害の中で生きるユダヤ人民衆の魂の救済を強調した。

このように、ハスカラーとハシディズムは、近代への入り口で同時期に、西欧と東欧のユダヤ人社会で展開された運動であるが、我が国におけるこれまでの歴史的評価としては、ハスカラーは「近代化」運動として捉えられ、ハシディズムは「反近代化」運動として捉えられ、全体としてハスカラーの方が、その否定的面や限界を認めながらも、肯定的に評価され、ハシディズムに対する評価は、マルチン・ブーバーやエーリッヒ・フロムらを除いて、その否定面に重点が置かれている。わが国のユダヤ人問題研究における啓蒙書的作用を果たした『ユダヤ人の歴史』（みすず書房）の著者であるシーセル・ロスと同書の中で、ユダヤ人に対する寛容が社会的に広がって行く18世紀の西欧社会と対比しながら同時期の東欧については、「復古運動が東ヨーロッパのユダヤ人大衆の間を吹きまくった。そこでは会食や恍惚状態、また歌が祈祷書を機械的に唱えるより遥かに重要なことと考えられた」（ロス、p.225）と記述し、ハシディズムについてその復古的側面や神秘的側面を指摘している。また前出の徳永氏は、「ブーバーやフロムのハシディズム再発見は20世紀の西欧の中心的・知的世界の出来事であって、彼ら自身が、素朴で純真なハシディズム信者だったわけではない。現実の歴史的事態としては、バッテンベルクが診断するように、『東欧地域のハシディズムは伝統的なユダヤ社会を強化し、中欧におけるハスカラの伝播を妨げた』と言わなければならない。東欧ユダヤ人が伝統保持のために払った代償は、古い生活様式のセメント化と教養目標をラビ的知識へ極限することだった。ロシアないし他の東欧諸国のユダヤ人が19世紀に直面していると思なした諸問題を、彼らは——ピンスカーの「自己解放」の要請にもかかわらず——ほとんど自力では、しかるべく解決することはできなかった。」（徳永恂、p.269-270）と述べている。また、イディッシュ文化の研究者である上田和夫氏は、「ハシディズムの真の敵は、およそこれまでのハシディームの生き方を否定するハスカラなのである。一方は非合理主義、もう一方は合理主義の典型といえるだろう。」（上田和夫『イディッシュ文化』、p.165）と述べている。そしてまた、ロシアのユダヤ人問題に関する、恐らく、わが国最初の本格的な研究書であろう『ロシア社会とユダヤ人』（ヨルダン社、1996年）を著した黒川知文氏は、ロシア正教とハシディズムの教義や儀式、礼拝の比較検討を行い、次のような結論を述べている。—「ハシディズムは、その神論においては、ロシア正教と類似しているが、礼拝論、祈り、人間論において、両者に非常な違いがある。とりわけ、ハシディズムの身体を用いる礼拝のあり方、集団的熱狂状

態、喜びの表明、ツァディクの存在は、ロシア正教とは対照的な要素である。このような、集団志向のハシディズムが、東欧とロシアのユダヤ人社会に定着したことにより、ユダヤ社会は、非ユダヤ社会から、さらに孤立していった。このような状況が、ロシアの中に全く異なる文化と社会を持つ、異邦人としてのユダヤ人像を形成し、ポグロムの日常生活における発生要因となったと考えることができる。」（黒川知文『ロシア社会とユダヤ人』、p.194）

以上のように、ハシディズム運動に関しては、その後進性や神秘主義の反近代的否定的側面が強調され、歴史的評価としてマイナスの評価を与えられているが、私としてはこのような評価については慎重にならざるを得ない。近代における「西欧」と「東欧」の相互関係およびユダヤ神秘主義の歴史的展開に目を向ければ、ハシディズムとハスカラーの歴史的評価は上述のものとは異なったものになると考える。「ユダヤ人が生き残ったのは『歴史に逆らって生き残ったのではなく、歴史の中であって、歴史を通して』生き残ったのである」とマルクスは『ユダヤ人問題について』の中で述べているが、ハスカラー運動を推進したドイツ系ユダヤ人と同様に、ハシディズム運動を担った東欧（特にポーランド）ユダヤ人もまた、「近代」という時代に逆らったのではなく、まさに「近代」にしたがって生きたのである。ただエルベ川を境にして西と東では、その「近代」の意味が異なっていたのである。西欧の「近代」と東欧の「近代」はダイナミックな相互規定的関係にあって、コインの裏と表のごとく全く異なった現実を作り出して行った。ユダヤ人は、西においても東においてもその現実に適応して生きる方向を探ったのであり、西ではその方向がハスカラーとなり、東ではハシディズムとなった、と大筋で言うことが出来る。西欧と東欧のユダヤ人がそれぞれ生きた相互規定的な二つの異なる「近代」を、イマニュエル・ウォーラーステインは、「近代世界システム」における〈中核〉と〈辺境〉および〈半辺境〉という概念を使用して記述している。

西欧と東欧の近代

資本主義的「世界経済」の生成史を描き出したウォーラーステインの『近代世界システム』によれば、西欧と東欧の関係は次のように把握されている。15世紀までの西欧と東欧は、ほぼ同等の経済的・社会的発展を遂げてきたが、16世紀になると複雑な構造をもつ単一のシステムを構成しはじめ、両地域は相互に補完し合いながら、「ヨーロッパ世界経済」を構成するようになった。西欧はこの資本主義的「世界経済」の中で商工業を担う〈中核〉部を形成し、東欧は西欧の工業発展のための原料生産者の役割をになう〈辺境〉となり、その経済構造は植民地型経済構造をとるに至った。東欧は西欧の「パン籠」になったと言われる。また西欧の中でかつて最先進地域であった地中海地域は〈半辺境〉となり、〈中核〉、〈半辺境〉、〈辺境〉の三つの地域は、政治的には統合を欠くが、「ヨーロッパ世界経済」と呼ぶ単一システム内で分業体制を形成する。そして、これらの三地域には、それぞれに対応する労働管理形態が現れる。〈中核〉地域にはジェントリー（資本家的地主）に雇用される「自由な賃労働」が、〈半辺境〉地域では「分益小作制」が、〈辺境〉地域では「再版農奴制」や「奴隷制」のような強制労働が現れる。また、統治形態に着目すれば、中核地域には中央集権的国家機構を持つ国民国家が成立して行ったのに対し、辺境地

域では「ヨーロッパ世界経済」中核部の市場との結びつきによって利益を得る地主が、開放経済を望み、中央集権化に抵抗した結果、国家機構が次第に弱体化し、ついには強力な国家機構を持つヨーロッパ諸大国の植民地的状況を呈するようになる。1772年、1793年、1795年にロシア、オーストリア、プロイセンによって分割されたポーランドはその典型的ケースである。

ほぼ以上のように、ウォーラーステインによって「ヨーロッパ世界経済」内における西欧と東欧の関係は把握されている。そして、このウォーラーステインによって提示された〈中核と辺境〉という〈西欧―東欧〉関係の視角を使いながら、東欧の民族問題の歴史と現在の問題を『統合ヨーロッパの民族問題』（講談社、1994年）の中で追求した羽場久滉子氏は、東欧と西欧の近代のコントラストを、マイノリティーの立場に立ちながら、次のように記述している。

西欧の「近代」の主な特徴が、封建制身分社会の解体と、国民国家・市民社会の形成を前提とした資本主義的工業化にあるとすれば、東欧の近代は、封建制と身分社会の再編強化、自民族の国家の解体と市民社会の不在の中で行われた封建的農業の「近代的」再編であるという点で、まったく逆の構図となっている。東欧が近代を準備するさいに、「近代」の特徴とは相反するシステムが誕生した過程は、「長い十六世紀」「長い十九世紀」と呼ぶことが出来る。それは、十六世紀に西と東に分断され、東は西に構造的に組み込まれることによって、十六世紀的状况が十九世紀まで続いてしまうことになった、ということである。その特徴の第一は、ヨーロッパ大陸の西半分が封建制を解体させつつある時期に、東半分では、封建制はかえって再編強化されたということである。すなわち、東欧は、西の資本主義工業発展の農業後背地として構造的に利用されることになり、その結果、農奴制は解体されず近代的に再編されて十九世紀まで温存されたのである。これを、エンゲルスは、農奴制が資本主義発展の構造の中に組み込まれて再編強化されたという意味で、「再版農奴制」と呼んでいる。その第二の特徴は、近世から近代にかけて、ヨーロッパ諸大国が中央集権的な国家形成を行い領土を拡張していった結果、大国に隣接していた東欧では逆に、中世的な王国の解体と大国への組み込みが促進されたということである。ポーランドは、オーストリア、プロイセン、ロシアの三国によって分割され、ボヘミア王国やハンガリー王国もハプスブルグ家に組み込まれた。こうして、西欧がほぼ国民国家形成を完了した十九世紀に、東欧のほとんどの国が逆に周辺諸大国の支配下におかれた。その結果、東欧の諸民族は、ヨーロッパ全体でナショナリズムが成長した十八世紀末から十九世紀前半にかけて、民族意識を強く燃え上がらせたものの、それに対応する自分の国家をもっておらず、大国に組み込まれる前の過去の中世的王国に民族の正当性を求めるしかなかった。近代市民社会と資本主義の成長は、とくに東欧では歴史的にこの地域民族を安定的に発展させる方向ではなく、進歩と近代的発展の名に下に同化をせまり、農奴制を再編強化し、彼らを永遠の少数者に固定し、ないしは滅ぼそうとしてきた。少数・弱小民族の滅亡への恐怖は、東欧のほとんどの民族に存在した。（羽場久滉子『統合ヨーロッパの民族問題』、p. 30-60）

羽場氏によってこのように捉えられた、東欧諸民族にとっての「近代」の歴史的状況の中に、もちろん東欧ユダヤ民族もあり、彼らの民族の運命はポーランド分割、フランス革命、ナポレオン戦争によって劇的な影響を受けた。今ここで問題にしているハシディズムとハスカラーについての考察も、このような歴史的状況との関わりの中で論じられなければならない。ハスカラーに関しては、西欧社会全体の近代化の影響をうけていることは、周知のことであり、ハスカラーの

意義も限界も近代化された西欧社会、つまり西欧市民社会の美点や限界との関わりで論じられて来た。しかし、ハシディズムに関しては、ユダヤ神秘主義の流れに属する復古主義的宗教運動として、相対的に孤立したユダヤ人社会内の独自の宗教運動として把握され、せいぜいポーランド史の中での位置づけに止まり、東欧および西欧社会の近代化との関わりで、その発生、展開を論じるという視角はこれまででなかった。しかし、ウォーラステインによって提起された「近代世界システム」（西欧〈中核〉—東欧〈辺境〉関係）の枠組みや、羽場氏によって意味づけられた東欧諸民族にとっての危機の時代としての近代という視角を採用することによって、ヨーロッパ社会の近代化との関わりで、ハシディズムを論じることができると考える。

シモン・ドゥブノフは、彼の『ユダヤ史』の近代編の「同化と民族運動」の章で「メンデルズゾーン（ハスカラーの推進者）とフランス革命がもたらした文化的変革期から、西方ユダヤ人と東方ユダヤ人の進む道はわかれた。国民および民族としての厳しい孤立の中にあったドイツ・ポーランドユダヤ人をそれまで統括して導いていたヘゲモニーは二方向に分かれた。ドイツのユダヤ人は古くからの原則を斥けて、ユダヤ啓蒙主義の道を進んだ。一方ポーランドのユダヤ人は、しばらくして、主として、ロシアとオーストリアの臣民になったが、自らの独自性を維持して、新しい文化的影響を受けることがすくなかった。」（S.ドゥブノフ, p.61）と述べている。ドイツユダヤ人とポーランドユダヤ人の分かれ道となったところには、何があったのだろうか。ハスカラーとハシディズムの発生と展開をヨーロッパ社会の近代化との関わりで検討することによってこの問題に対する答えを探りたい。

西欧の近代への移行過程と中・東欧ユダヤ人（アシュケナージ）の形成

「アシュケナージ」という言葉は元々は、中世のユダヤ文献で最初はライン川流域に住み、その後ドイツの全領土に住むようになったユダヤ人を意味していたが、のちにはドイツ居住のユダヤ人だけではなく、その起源が中世ドイツのユダヤ住民に発する全てのユダヤ人を表すようになった。そして現在では、ドイツを中心に形成されたユダヤ人の文化的・社会的環境に属するユダヤ民族のグループ全体を指す用語となっている。イディッシュ語を使用することがアシュケナージの特徴であり、彼らの文化はイディッシュ文化と呼ばれている。十五、十六世紀にはアシュケナージ人口の主力部分はドイツからボヘミア、モラヴィヤ、ポーランド、リトワニアへ移っていた。とりわけポーランドに多くのユダヤ人が移り住んだ。この時期までに西欧から東欧へのユダヤ人の移動が行われたのである。その移動の原因は西欧でのユダヤ人に対する激しい迫害と、ポーランドにおけるユダヤ人保護政策であったと言われている。「十二世紀から十五世紀にかけてのことだ。何千人というユダヤ人たちがドイツから東や北に向かっていった。彼らは十字軍やベストによる迫害を逃れてドイツからやってきたのである。」（上田和夫『イディッシュ文化』, p.142）十字軍、ベスト、儀式殺人や聖餅冒瀆の建議といったものがユダヤ人迫害に利用されたが、しかし、これらはユダヤ人の東欧への移動やユダヤ人迫害の真の原因ではない。ヨーロッパ社会全体の基本構造に根本的変化が生じつつあった。その社会構造の変化が、ヨーロッパ社会におけるユダヤ人の地位に変化をもたらし、ユダヤ人の東方への移動を引き起こしたのである。

イギリスでは1290年、フランスでは1394年、スペインでは1492年に、それぞれ決定的なユダヤ人追放が行われたが、これらの追放は、全て国王の決定によって実行された。シーセル・ロスはいくつかの追放の特徴を「ユダヤ人の追放はもちろん、前にも知られていなかったわけではない。しかし昔はごく狭い地域に限られていた。だが今やヨーロッパの国々で国王の権威が確立し、それが国全体に及ぶようになった。そこで十三世紀末におけるどのような反ユダヤ人的処置でも、百年前の場合よりもはるかに重要な意味をもっていた。」（ロス、p.149）と記している。

ロスの指摘の中で重要な点は、王権の確立とユダヤ人追放を関連づけていることである。イギリス、フランス、スペインにおけるユダヤ人追放は、封建的地方分権を打ち倒し、強力な国家機構の確立と中央集権化推進の過程で生じた事件として理解されるべきである。中央集権化は、官僚制の整備、武力の独占、それらを維持する財政基盤の確保、均質な文化をもった国民集団の形成によって達せられるが、これらの中央集権化の方法的過程においてユダヤ人は不必要とされたのである。そして、それらの実行を可能にした条件が出現していた。経済的にイスラーム世界の〈半辺境〉だった西ヨーロッパが、十二世紀当たりから自立しはじめたことである。湯浅超男氏は『ユダヤ民族経済史』（新評論、1991年）の中で、「イスラーム世界でのそれと比較してユダヤ民族の身分は不安定であった。しかし、中世の初めには東西の仲立ちという役割から西ヨーロッパにとってユダヤ人は必要な存在であった。ところで、十二世紀の末より、状況は変わりはじめた。それは西ヨーロッパが自立してユダヤ人という仲立ちを必要としなくなったからである」（湯浅超男、p.156）と書いている。

確かにユダヤ人は中世を通じて商業活動の分野で大きな役割を果たしていた。800年から1200年にかけて、ロシアとポーランドを経由する北方の陸上ルートを使って、西欧と東欧の国際貿易になったのは主にユダヤ人であり、またイスラーム世界と西ヨーロッパ世界の交易ネットワークを確立していたのもユダヤ人であった。西欧にとっても東欧にとってもイスラーム世界にとってもユダヤ人は頼みの綱であった。したがってこの時代には東欧でも西欧でも、イスラーム世界でもユダヤ人の法的地位が高かったが、しかし、十字軍が始まって以後の中世後期になると西欧のユダヤ人の地位は、社会的にも経済的にも確実に低下していったのである。このことを端的に示しているのが西欧諸国の中で最初にユダヤ人を追放したイギリスの例である。

追放以前、イギリス国王は国庫の重要な収入源としてユダヤ人商人に頼っていた。十二世紀中頃イギリス国内に出来ていたユダヤ人共同体（ロンドン、ウィンチェスター、ヨーク、オックスフォード、ノーウィッチ、ブリストル）に対して実に動産の四分の一に相当する額の御用金が課せられていた。ロスによれば、中世イギリスのユダヤ人は「王室付きの家僕」と見なされており、この国王との特殊な関係を持つことにより、ユダヤ人はイギリス国内で生存の保証や社会的地位を確保する一方で、国王の思うがままに課税され、活動全般にわたって統制されていた。ユダヤ人の利益の大部分が国王の金庫に流れたので、国王にとっては、ユダヤ人を保護し、彼らの商業活動を奨励することは利益に叶うことであった。しかし、他方では、彼らの競争相手であるユダヤ人以外の商人は彼らを邪魔だと思っており、また地主にとっては彼らは債権者であった。それで、当然のことながら、この二つのグループはユダヤ人排除の圧力を国王にしばしばかけていた。ユダヤ人の競争相手や地主にとっては、ユダヤ人は宗教的な口実で攻撃しやすい存在だったのである。その結果、「当初、国王がユダヤ人の納める租税に頼ることが多かった時代には、ユダヤ人

優遇策がとられたが、そのうちに中核地域の諸国では自国のブルジョアジーが成長し、ユダヤ人に対しては厳しい法が次々と成立した」（ウォーラーステイン『近代世界システム』I, p.219）という状況になって行き、「ユダヤ人に関する法律」が1275年に制定され、もはや国王の要求に応えることが出来なくなっていたユダヤ人は金融業を禁止され、1290年にエドワード一世によってイギリスから全ユダヤが追放された。

ユダヤ人に代わってイギリス国王が国庫財政の供給源として引き入れたのは「ロンバード人」「カオール人」として知られていたイタリア人金融業者であった。十三世紀にはイタリア商人が地中海貿易の主導権をイスラム商人やユダヤ商人から奪い、十字軍に協力することによって莫大な利益をえていた。彼らはイタリアにおける都市の発展と商品貨幣経済進展の中で生まれてきたが、カトリック教会のローマ教皇庁への上納金の送金とそれより派生した教皇庁への金融と結びついて成長し、ローマ教皇庁という有力な後援者を得てヨーロッパ中の教会や商人に対して金融をおこなうようになっていった。そして、ついには国王への融資を担当するまでになり、ユダヤ人にとって代わったのである。

フランスにおいてユダヤ人が辿った運命はイギリスのユダヤ人の場合と近いものであった。カペー王朝は十二世紀のおわり頃からカトリシズムに基づく（1179年のラテラン教会会議で打ち出された政策に基づく）反ユダヤ主義政策をとり始めたが、実際にはその政策は収奪と追放の繰り返しであった。そして、フランスの場合特徴的な点は、王権の拡張にほぼ正比例する形で、ユダヤ人に対する収奪と追放の規模が拡大し、最終的にはフランス全土から追放されるという過程を辿ったことである。「フランスにおけるユダヤ人の歴史は王権拡張の過程との関連でのみ理解され、そして結局はそれがユダヤ人に深刻な災禍をもたらすものとなった」（ロス, p.151）といわれるように、カトリシズムを利用した中央集権化、国民の文化的均質化の過程の中で排除されて行ったユダヤ人の歴史の典型的な例をフランスにおいて見るができる。

スペインにおけるユダヤ人追放のケースは、イスラム世界の文化的・経済的（半辺境）だった西ヨーロッパ世界が、その従属的地位を脱して（中核）にのし上がって行く過程でユダヤ人にかなる運命が待っていたを劇的に示したケースである。

近代世界のユダヤ人は、中欧・東欧地域に居住するアシュケナージ系ユダヤ人と、主として西欧・地中海地域に居住するセファルディ系ユダヤ人の二大グループを作っていたが、この小論で問題にしているグループはアシュケナージ系ユダヤ人である。しかし、ヨーロッパ近代のとの関わりで、つまり「ヨーロッパ世界経済」の形成との関わりでユダヤ人の歴史を考察する場合、スペインのセファルディ系ユダヤ人の運命にも注目しておく方が、問題点がより明確になると思われるので、スペインにおけるユダヤ人追放のケースも述べておきたい。

セファルディー系ユダヤ人とは、中世まではイスラム教の支配下にあったイベリア半島で寛容な宗教政策のもと（特に後期ウマイヤ朝）多彩な活動の場を与えられて活躍していたが、十一世紀の中頃から始まったキリスト教徒によるレコンキスタ（国土回復運動）がグラナダ占領によって完成した1492年にスペインから追放されたユダヤ人の後裔を指している。1492年3月夫婦であるアラゴンのフェルナンド二世とカスティリアのイサベラ女王は、グラナダ王国を滅ぼし、イスラム教徒をスペインから一掃するとすぐに、ユダヤ人を追放する勅令に署名したのである。追放されたユダヤ人は、半数はポルトガルへ、その他は北アフリカ、オスマントルク領小アジア、プロ

バンス、イタリア、近東、バルカン半島、北ヨーロッパ（オランダ）に流れていった。ポルトガルに移ったユダヤ人も1496年にはキリスト教への改宗か追放かの二者択一をマヌエル王の勅令によって迫られた。キリスト教に偽装改宗してスペイン、ポルトガルに残ったユダヤ人もいたが（彼らはマラーノ（豚）と呼ばれた）、その後激しい異端審問にさらされ、16世紀から18世紀にかけてイベリア半島を去るセファルディー系ユダヤ人の流れは途切れることがなかった。

なお、スペインからユダヤ人の追放と同時にイサベラ女王に支援を受けたコロンブスがサンタ・マリア号に乗ってパロマ港を船出し、西インド航路開拓に赴いている。ユダヤ人がスペイン領から追放される期限は1492年8月2日であり、一方コロンブスは8月2日の夜11時までですべての船員の乗船を完了させ、8月3日の日の出前に出港している。「アメリカ発見とユダヤ人追放はスペイン全史の中で首尾一貫性を持っていた」（ヴィーゼンダール）と言われているが、その後スペインを含めた西欧諸国がアメリカ大陸を植民地化（辺境化）し収奪することによって、工業化及び「近代化」を進め、〈中核〉国家になっていった歴史を見る時、スペインにおけるユダヤ人追放劇は、「ヨーロッパ世界経済」の成立過程の中で〈不要物〉として西欧から排斥されていくユダヤ人の立場を象徴的に表していると考ええる。

最後にドイツの場合であるが、ドイツの場合はイギリス、フランス、スペインの場合とは少し事情を異にする。ユダヤ人に対する迫害の過酷さは他の西欧諸国と同様なものであったが、皇帝以外に大領主、小領主、自由都市、教会領が支配権を維持し、中央集権化が行われなかったため他の西欧諸国におけるようなユダヤ人の大量追放は見られなかった。しかし、地域的な大量虐殺や追放は各地で絶えることなく行われ、ある地方で虐殺、追放が行われればその地方のユダヤ人はドイツ国内の他の安全な地方に逃げたのであった。だが、ペストが流行した14世紀中頃は、ドイツ・ユダヤ人殉教史の中でも最悪の時代でとなった。ペスト流行の犯人と見なされたユダヤ人に対する虐殺が猖獗を極め、60の大ユダヤ人集団と150の小集団が絶滅させられ、ドイツ・ユダヤ人社会は回復不可能な打撃を受けた。ペスト終息の後、ドイツの諸都市は経済的理由から再びユダヤ人を呼び戻したが、ヴェンツェスラウス王による対ユダヤ人債務免除政策によって経済的打撃を被ったユダヤ人は、東方へ移動し始めた。1420年には、フス派と共謀したとしてカトリック教会の迫害によってウィーンのユダヤ人共同体が壊滅させられた。そして、バーゼルで開かれたカトリック教会総会（1433年）で反ユダヤ人法が決定されて以後、カトリック教会主導の過酷な反ユダヤ人運動が展開され、1519年には由緒あるラティスボンの古いユダヤ人共同体も絶滅させられ、フランクフルト・アム・メイン以外のすべてのユダヤ人共同体はドイツから姿を消すに至った。ドイツのユダヤ人は、16世紀にはそのほとんどが東欧（ポーランド、リトワニア、ボヘミア、モラビア）へ移っていたのである。

以上見てきたように、十字軍以後16世紀までに西欧社会からユダヤ人の共同体は、少数の例外を除いて姿を消し、東欧に移動して行った。東欧の中でもポーランドとリトワニアがその中心になり、中世ドイツ語を基礎にして作られているイディッシュ語を話すアシュケナージ（東欧ユダヤ人）の一大グループが形成されたのである。彼らの居住地はドイツとロシアに挟まれた中・東欧であり、その文化はイディッシュ文化と呼ばれる。では次に、東欧は何故ユダヤ人を受け入れて行ったのかを、ポーランドを例に見て行きたい。

イディッシュ文化圏の形成と「ヨーロッパ世界経済」における東欧

前章では、西欧世界がイスラム世界から経済的に自立し、商品経済の進展と国家の中央集権化の過程で、西欧世界からユダヤ人が排斥・追放されていった様子を見たが、追放されて行ったユダヤ人のうちアシュケナージ系ユダヤ人が逃れて行った先は東欧であった。何故、東欧がユダヤ人の流入先になったのであろうか。ウォーラステイン流に言えば、「ヨーロッパ世界経済」の中核地域にはユダヤ人がいなかったが、なぜ辺境や半辺境ではユダヤ人が増えたのか、ということである。

ロスの『ユダヤ人の歴史』の中の「ポーランド（1648年まで）」の章によれば、ポーランドが積極的にユダヤ人を受け入れてきたそもそもの原因は、タタール族の侵略によって国土が荒廃し、もともと少数であった中産階級が消滅し、商工業が壊滅的打撃を受けたことであった。それ故十三世紀の中葉以後、ポーランドの諸侯はドイツから商人、職人を積極的に招致する政策をとり、その時ドイツ人と共に多数のユダヤ人もやって来たということである。1264年にはボレスラフ〈敬神王〉がユダヤ人を保護し自由を与える憲章「カリシュの条例」を發布して、積極的なユダヤ人受け入れ政策を取った。これ以後、ポーランドにおいては、その支配者層がユダヤ人に友好的な政策を継承して行った。ボレスラフ敬神王から一世以後、ポーランドを統一したカジミエシュ大王は、1358年にボレスラフ敬神王の憲章を確認し、さらにユダヤ人に経済活動上の便宜を提供した。1388年にはリトワニア大公国でもユダヤ人はポーランドと同様の権利章典を獲得し、実際上はポーランドよりもさらに有利な条件の下で社会・経済活動を行うことが出来た。ポーランド、リトワニアの支配者のユダヤ人優遇策は、ドイツのユダヤ人迫害の嵐が終わった時代にも続けられ、ユダヤ人は生命、財産、権利が保証され、経済活動の大きな自由を享受した。ヨーロッパのユダヤ人にとってポーランドは1648年のボグダン・フメリニツキーの乱まで「約束の地」であり続けた。ポーランドでこのようにユダヤ人が歓迎された理由を、ウォーラステインは、「長期の16世紀」（これはフェルナン・ブローデルの学説に依拠している時代区分で、1450年から1640年までを指す。）に形成された「ヨーロッパ世界経済」の成立過程の中で次のように説明している。

西欧では初期的な工業の展開とともに、農業の基礎がしだいに多様化し、商業ブルジョアジーを成立させたので、中央集権化を進めていた国王は国家財政の支柱として自国の商業ブルジョアジーに期待を寄せることが出来るようになると同時に、彼らを政治的にも考慮に入れるようになった。そして「ナショナリズム」の発揚が自然な成り行きとして現れた。しかし、東欧ではこれとは異なった様相を示していた。西欧に比べると王権が比較的弱体で、商人の力も弱かったのに反し、農業生産者層（領主・地主層）は強力であった。つまり、支配者層が成立過程にある世界市場に第一次産品を売って利益を得ようとする人々から構成されていた。このような16世紀の東欧で問題だったのは、商業ブルジョアジーがいたかいなかったかということではなく、この商業ブルジョアジーのほとんどが外国人なのか自国人なのかということにあった。もし自国人の商業ブルジョアジーが優勢ならば、彼らは政治的にも勢力を伸ばし——ユダヤ人ならあり得ない——産業ブルジョアジー化したかもしれない。そうなれば、おそらく国民経済の「開放性」を低

下させ、中核諸国への農産物輸出で利益を得ている領主層の利益を脅かしたであろう。16世紀の東欧で、ユダヤ人が歓迎された理由はまさにここにあり、領主層が自国人の商業ブルジョアジーよりもユダヤ人の方を現地の地方商人として不可欠な存在と考えたことにある。近代初頭の東欧は土着ブルジョアジーの没落の時代であり、他方ユダヤ人は農村で領主の代理人や小集落の商工業者としての役割をはたすようになったことが知られている。

このようにユダヤ人は「ヨーロッパ世界経済」というヨーロッパ分業体制の中で、自己の宗教的・文化的生活の基盤である定住地と生活手段を西欧の農業後背地となった〈辺境〉東欧で得ることが出来たのである。そして、その地でユダヤ人は自治制度を発達させ、ポーランドのユダヤ人は、ユダヤ人社会の実質的「議会」に当たる「ヴァアド」（審議会）を持つに至る。以上のような経済的条件の下で、宗教としてはユダヤ教の律法主義（ラビ主義）に従い、言語としてはイディッシュ語を使用する社会的・文化的なまとまりのあるアシュケナージのイディッシュ文化圏がポーランドを中心とする東欧に展開したのである。

再版農奴制とユダヤ教メシアニズム運動の発生

ユダヤ人は東欧の商品経済の中で重要な役割を果たすことを基盤にしてイディッシュ文化圏を作り上げたが、しかし、彼らに繁栄をもたらした東欧における彼らの経済的役割が、17世紀には嘗てない災厄をユダヤ人社会にもたらす原因となり、東欧ユダヤ人は受難の時代を迎えることになるが、その受難の時代に正統的ラビ主義に対抗する形で神秘主義的メシアニズム運動が東欧ユダヤ人社会を包み込んで行くのである。そして、この小論のテーマであるハシディズムはまさにこの神秘主義運動の最終形態であり、また、神秘主義とは対立するかのようになっているユダヤ啓蒙主義も実はメシアニズム運動がその出現を内面的に準備したのであった。

ユダヤ人は農業社会に於ける商人や手工業者の役割を果たしていたが、ポーランドでユダヤ人が担っていた職業的役割との関わりで特に注目しなければならないのは、アレンダ制と呼ばれるポーランド独特の経営方式である。これは領主・地主が土地、水車場、宿屋、居酒屋、醸造場、税金の徴集権等をリースし、請負業者に経営・業務を任せる制度である。このアレンダ制においてユダヤ人が決定的役割を果たした。西欧中核諸国の農業後背地となったポーランドの農業は資本主義的な性格を帯び、商業化が進んでいたが、この資本主義的農業生産を行うための農民支配の形態が「再版農奴制」であった。ウォーラーsteinは「再版農奴制」を「換金作物栽培のための強制労働制」と呼んでいるが、貴族領主層は実際の農地経営に対する能力も意欲も持ち合わせておらず、ユダヤ人がその経営・管理の中心的役割を担い、彼らが「強制労働制」の監督官として農民に対していたのである。圧倒的多数の農民は強化された農奴制の下で、徹底的な搾取と抑圧の下に置かれていたが、農民にとって直接の抑圧者はユダヤ人であった。特にポーランドの支配下にあったウクライナの農民はギリシャ正教徒であり、カトリック教徒のポーランド人地主や監督者であるユダヤ教徒とは宗教的な反目も深かった。それで、ポーランド地主の傭兵であった正教徒であるコサックが彼らの地位と待遇に不満を抱き、ボグダン・フメリニツキーを頭目に立てて反乱を起こした時、農民はコサックを農奴の解放者であり正教徒の擁護者と見なして反乱

に合流し、その反乱はウクライナ全土におよぶ反ポーランド・反農奴制的性格の大反乱となった。そして、ユダヤ人はポーランド地主のエージェントとして、農民からの及び正教徒からの敵意を一身に集め、コサック軍による残忍この上ない虐殺にさらされたのである。1648年と1649年にコサックによって約30万のユダヤ人が殺され、その残虐行為は、今世紀ヒトラーによってなされたホロコーストを除けば、歴史上かつてなかった残虐な大量殺人であったと言われている。フメリニツキーの乱はウクライナのユダヤ人社会を恐怖のどん底に陥れ、東欧のユダヤ人全体に衝撃を与えた。さらに1655年には、ポーランドの弱体化を見て取ったスウェーデンが、バルト沿岸地方を侵略しリトワニアを奪ったが、この時にもユダヤ人が殺戮のターゲットにされ、ユダヤ人受難が続いた。この時代の恐怖体験は、ユダヤ人社会の弱体化をもたらしたと同時に東欧ユダヤ人の心性に地殻変動をもたらす出来事となった。それは、1492年のユダヤ人のスペイン追放以来、カバラーと呼ばれるユダヤ神秘思想の中で追放とメシアによる救済に対する関心が受け継がれてきたが、フメリニツキーの乱以後の東欧ユダヤ人社会の中で、カバラーのメシアニズムへの関心が高まってくるのである。

ユダヤ教には二つの大きな思想的流れがある。一つは律法を重んじる正統派のラビ主義であり、他の一つは個人と神との一体感を重視する神秘主義の流れである。両者とも神とイスラエル民の契約という根本観念を認めていたが、「神はなぜその選民にかくも多くの苦難を与え賜うのか」という問いに対して異なった態度を取っていた。ラビ主義はこの問いに対して、〈ユダヤ人は律法を粗略にし、その罰を受けている。神との契約を果たすためには、団結して、戒律を守り、タルムードに書かれている解釈に従い、一層の努力をしなければならない〉と答え、戒律やタルムードの厳密な解釈を追求し、自己の生活がそれらから外れてないかどうかということに最大の関心を置く自己批判的生活態度を要求した。一方、神秘主義者は、ユダヤ人は神との約束を破ったと考えたが、その理由は、良心の欠如というより、理解の欠如にあると考えた。トーラー（律法）は神との契約の外形にすぎず、そこにはもっと深い意味が隠されており、その言外の意味を神秘的、直感的な方法で解読しなければならないと考えた。そして、カバラー（ユダヤ神秘主義）はその方法を会得するための秘技であった。1648年のボグダン・フメリニツキーの乱に始まる荒廃以前には、ラビ主義が支配的であり、ユダヤ人社会も安定していて弾力性を持っていたため、カバラーも秘教的性格の教義としてラビ主義と共存していたが、外部からの迫害が打ち続くにつれて、ラビ主義の支配力が弱まり、両者の葛藤が激しくなり、その葛藤は政治的意味あいを持つようになってきた。民衆が、いつ終わるとも知れぬ苦難の日々に、タルムードからカバラーに目を向けるようになり、カバラーのメシア主義精神が希望の光であると見なされるようになったのである。

偽メシア・サバタイ・ツェヴィイの登場とユダヤ教の近代化への道

追放と救済の神秘主義的解釈の発展と普及に重要な役割を果たしたのはセファルディー系のカバリストで上部ガリラヤの人、イサアク・ルーリア（1534—72）の体系であった。彼の教えは17世紀には離散しているほとんどのユダヤ人の思想、宗教的儀礼の中にくり入れられていたが、そ

の内容は極めて超自然的で、メシアの到来と救済が間近に迫っていること告げていた。しかも、ボグダン・フメリニツキーの乱の勃発した1648年をメシア到来の年と予言していたのである。したがって、ユダヤ人たちは、その年の地獄のような苦難も、メシア到来を確認する予備的浄化であると、逆説的に解釈したのであった。そして、ちょうどその時代、トルコのスミルナのカバリスト、サバタイ・ツェヴィが、1648年の終わりにシナゴグの中で突然、神秘的な神の名を完全に唱えたのであった。それ以後彼についてメシアとしての様々な伝説や噂が広まったが、決定的だったのは1662年のガザの若い学生ナータンとサバタイ・ツェヴィの出会いであった。ナータンはある日、神の幻影を見て予言者として覚醒し、サバタイ・ツェヴィがメシアであるという神の声を聞き、サバタイ・ツェヴィにメシアとしての確信を初めて与えたのであった。躁状態と鬱状態を繰り返す精神異常者と思われるサバタイ・ツェヴィの異常な反律法的行為とカリスマ的性格、そしてそれを逆説的に「神聖な行為」と意味づける〈予言者〉ナータンの独創的神学と疲れを知らぬ情熱的活動によって、〈メシア〉サバタイ・ツェヴィの出現のニュースは、瞬く間にヨーロッパのユダヤ人社会に広まり、とりわけ大迫害を蒙ったポーランドのユダヤ人は、大いなる希望をもってその「福音」に応えたのであった。ウクライナの文学者ラトフスキーはその時の事態を次のように書き残している。「ユダヤ人たちは驚喜した。ある者は自分の家や財産を放棄して、何の仕事もせず、メシアがやがて到来して、自分らを雲の上を通してエルサレムにつれていくと、と触れてまわった。またある者は何日間も断食し、子どもたちにさえも食べさせるのを拒否し、厳寒の季節に、最近つくられたばかりの祈祷の文句を唱えながら、氷の穴から身を浸した。気の弱い、窮乏したキリスト教徒の中には、偽メシアの行った奇跡の話聞きつけて、またユダヤ人の止めどもない傲慢さを見るにつけて、キリストに疑問を抱きはじめてたのもいたのであった。」(D. ヴァカン『ユダヤ神秘主義とフロイド』, p. 106)

サバタイ・ツェヴィは1666年を救済の年となると予言し、メシアとしての業を当時エルサレムを統治していたトルコのスルタンを退位させることから始めるべくコンスタンチンノーブルへ赴いたが、到着するや否や彼は投獄されてしまった。だが、牢獄には彼を信奉するユダヤの大衆が世界中から贈り物を持って押し掛け、牢獄はあたかも王宮の如くになり、サバタイ・ツェヴィは幾千のユダヤ民衆の霊的指導者となった。このような事態に対シトルコ政府は、サバタイ・ツェヴィをスルタンの前に引き出し、イスラム教に改宗するか死を選ぶかを迫った。そして、サバタイ・ツェヴィはイスラムへの改宗を選び、メシアの背教と言う悲劇的結末でサバタイのメシア運動は一つの終局を迎えたのである。

さて、一年間歓喜と熱狂の嵐にディアスポラの民を巻き込んだ巨大な宗教的大衆運動（サバタイ主義）は、その見苦しい悲劇的結末によって、「むしろ巨大な失意と空洞を残し」、「ユダヤ人の精神状態は以前よりも一層惨めな有り様になった」との評価で簡単に片づけられているが、ゲルショム・ショーレムによれば、サバタイ主義運動は「失敗してもなお壮大な試み——内部からのユダヤ教の革命」であり、「中世以来のユダヤ人の意識に起こった最初の真摯な反乱」(G. ショーレム『ユダヤ神秘主義』, p. 396)であり、「ユダヤ教の新しい解釈を告知するユダヤ人の意識革命」(G. ショーレム, p. 398)であったのである。つまり、サバタイ主義によってユダヤ人の意識は、近代への扉を開かれたのである。ユダヤ人の意識と感情、生活を縛っていた律法が、メシアの出現によって不要で無価値なものになり、荒々しい反律法主義の意識が湧き起り、律法を守

るという理性的「信仰」から、「心の中で見えるものになった救済」の新しい世界を実現することが「信仰」であるという新しい「信仰」の概念が誕生したのである。最も卑しむべき背教も、メシアの受苦として、キリストの死と復活と同様に、闇の国から再臨するという神秘主義的信仰態度となって、肯定的価値として称揚され、サバタイ・ツェヴィの背教と死のあとも、体制派である正統派ユダヤ人による弾圧にもかかわらず、サバタイ・ツェヴィがメシアであると信ずる者は絶えなかった。サバタイ主義はユダヤ人の古い凝り固まった律法意識を根本から掘り返したのである。したがって、サバタイ主義は、たしかにメシアの背教という結末によって失望と幻滅をもたらしたが、同時に、律法主義という精神的ゲッターからユダヤ人の意識を開放し、ユダヤ人が非ユダヤ的外部世界へ流入する条件を内面的に準備したのである。このことから、ユダヤ啓蒙主義を単に西欧の啓蒙主義思潮の刺激を受けてユダヤ人社会内部に生じた啓蒙運動と考えるのは誤りであり、ユダヤ啓蒙主義はユダヤ教内部で正統派との闘いの中からユダヤ神秘主義が生み出した精神運動として理解できるのである。そのことは、サバタイ主義の根強い信奉者が、最も早く啓蒙を受け入れた西欧世界に広い範囲に亘って住むマラーノ・ユダヤ人たちであったことが確認している。キリスト教に改宗したあのスペインのユダヤ人の子孫として、押しつけられた宗教意識の二重性の中に生きていたマラーノたちにとって、背教という受苦と結びついたメシアこそ、斯くも長きにわたって彼らの良心を苦しめて来たものを浄化し、救済してくれるメシアだったのである。ゲッターの世界から広大な西欧文化の世界へのユダヤ人の加入は、単なる文化の伝播・影響によって引き起こされた現象とは考えられず、上述したゲッター内の心理的条件の変化が、ユダヤ人が西欧文明へ参画して行く最も重要な要因の一つになったと考える。

一方ポーランドでは、サバタイ主義は西欧のユダヤ人に比べて、より深刻な失望と幻滅をもたらしたが、18世紀に入ってハシディズムという敬虔主義宗教運動を生み出し、この「ハシディズムの感情世界が、ユダヤ教の精神的革新に努力していた人々の精神を大きな力で引き寄せた」（G. ショーレム, p. 431）のである。

イサーク・ルーリヤのカバラ解釈によって準備されたメシア主義精神は、サバタイ主義という反律法主義の熱狂的大衆運動を経て、18世紀には西欧においてはユダヤ啓蒙主義（ハスカラー）を、東欧においてはユダヤ敬虔主義（ハシディズム）を生み出して行ったのである。

ハシディズムとハスカラー——イディッシュ文化圏の分裂

ハシディズムとハスカラーは、両者とも18世紀の中頃から運動としての姿を現してくるが、ハシディズムはポーランドのユダヤ人の心を捉え、ハスカラーはドイツのユダヤ人社会を捉え、それまで一つの文化的ヘゲモニーに従っていたイディッシュ文化圏は、この二つの運動によって分裂することになる。ハスカラーは、前節までで述べたように、律法主義の心理的ゲッターの消えたユダヤ人たちが、西欧の啓蒙主義呼応して生じて来た運動であり、ユダヤ社会の「近代化」という方向性を持つ運動であると評価されている。しかし、西欧文明社会に参入するためにユダヤ教を捨て、さらに彼らにとって母語であるイディッシュさえも捨て去っていく方向へ進んで行ったその運動は、痛々しいまでの宗教的・文化的ニヒリズムをバネにして推進されて行った運動で

もあったと考える。一方、ハシディズムは、我が国における評価では、伝統的なユダヤ社会を強化する保守的で「反近代的」な方向性を持つ神秘主義の運動であるとの否定的な評価が勝っているが、実際にはユダヤ教の改革に努力していた人々によって担われた運動であり、ユダヤ教史の上では「ハスカラーがユダヤ人と非ユダヤ世界との文化的橋わたしをしたのと同じように、ハシディズムは中世と近代の宗教的橋渡しをした運動である」（D. バカン『ユダヤ神秘主義とフロイド』、p. 121）と評価されており、そのことの意義を無視してはならない。

ハシディズムはルーリアのカバラーに従った、神と個人との直接の出会いを強調する大衆的「覚醒運動」であるが、サバタイ主義において破壊的なまでの大衆的影響力を発揮した黙示録的メシアニズムはここでは何の重みも持っていない。また、律法は放棄されていないが、それは内面からの「覚醒」を必要としない正統派の律法主義ではない。ハシディズムの使信の本質は、日々の現実の事象に対して人間の積極的参与を促すものとなっている。「存在の原時間、つまり神が世界をつくり、そしてそれを破壊した時、火花が世界の万物のなかに落ちこんだのである。物質の殻、鉱物、植物、動物の中に、火花は身を折り曲げ、頭を足の上に、手足を動かさない胎児のように、完全に人間に似た姿で隠されている。火花にとって救いはただ人間によってのみ可能である。ひとが日々出会う事物や生物から火花を浄化し、そして鉱物から植物へ、植物から動物へ、動物から人間へと、聖なる火花がその根源に帰還しうるまで、つねにより高い段階へ、つねにより高い生まれへ高めるかどうかは、人間に課せられた責務である。・・人間の火花にたいする奉仕は、日々の生活の中で生じる。・・君が着る衣服に、君が使用する道具に、君が食べる食物に、君のために苦勞する家畜に、すべてのなかに救いにあこがれる火花が隠されている。そしてもし君が事物や生物を注意深く善意と真実をもって取り扱うならば、それらを救うのである」「被造物は人間を待っている。神は人間を待っている。」（M. ブーバー『ハシディズム』、p. 93）このような「万物における神の内在性」という汎神論的世界観と「神は、自分で造った世界が人間によって救われることを望んでいる」という教えから生じて来る独特の律法概念によって、ハシディズムは、サバタイ派的な破壊的反律法主義に陥ることなく、正統派的な厳格で硬直した律法主義を緩めることにハシディズムは成功したのである。また、ショーレムは、ハシディズムの特徴として、ハシディズム信者の思考の中心点に個人生活の諸価値が確固たる地位を占めており、普遍的な思想から個人の倫理的価値が、言い換えれば「個人の自由」の感覚が生まれていることを指摘している。古い律法主義の崩壊を経験したポーランド・ユダヤ人は、「個人の自由」の感覚を育んだハシディズムによって、ユダヤ教から離れることなく、外部世界のダイナミックな変化に合わせて動く能力を獲得することが出来たのである。このようなハシディズム理解は、日本のユダヤ研究ではほとんど見られないのだが、西成彦氏がイディッシュ文学論の中で「宗教的実践の根幹に〈神との合一〉を据えたハシディズムは、理性重視の啓蒙主義に逆行するものと考えられがちだが、律法中心の強制型の宗教から自由意志による参加型の宗教への再編を通して、ユダヤ人を〈静かな群れ〉から〈騒がしい群れ〉へと変貌させてという意味で、それは、宗教を現代にまで生き延びさせる上で重要なジャンプをおこなったとも言える」（西成彦『イディッシュ』、p. 40）と述べていることは注目に価する。そしてハスカラーとハシディズムの西欧文明との関係については、ハスカラーのみが西欧文明を積極的に受け入れ、ハシディズムの方は西欧文明を拒否し古い生活様式に立て籠ったとの認識が一般的であるが、そのような認識は次の様に改められ

の必要があると考える。「(ハスカラーによる西欧文明への)はじめての移行は、われわれの比喻に従えば、手荷物なしでなされた。つまり、その移行はユダヤの古い伝統やユダヤ人のユダヤ性から、急速に、劇的に離脱することによって、なしとげられたのである。しかし、ハシディズムによって、その移行はもっとゆっくりと、規則的におこなわれるようになり、ユダヤ的伝統と西欧文明との結合が可能になった」(D.バカン, p.121)。

ともあれ18世紀後半から、イディッシュ文化圏においては、ポーランド・ユダヤ人とドイツ・ユダヤ人の道は分かれたのである。シモン・ドゥブノフの言う通り、その分裂を決定的に促した歴史的イベントは、フランス革命とポーランド分割であると考えられる。しかし、ハスカラーとハシディズムの分裂を生み出したより根本的な社会的条件は、「ヨーロッパ世界経済」における構造的な〈中核〉と〈辺境〉の問題に帰着すると考える。ドイツからポーランドに亘る地域に形成されていたイディッシュ文化圏は、「ヨーロッパ世界経済」の〈半辺境〉と〈辺境〉にまたがっていた文化圏である。ドイツは中核国家を目指して資本主義的工業化を押し進める過程で、封建制身分社会の解体と国民国家・市民社会を形成していったが、それは「身分としてのユダヤ教徒の分解」(下村由一『アンティセミチズムとシオニズム』)をもたらし、ドイツユダヤ人に対してドイツ社会への同化の条件がドイツ国家の側から作られて行ったのである。ここにユダヤ啓蒙主義が広がる客観的条件があった。ユダヤ啓蒙主義の中心地はベルリンであり、ユダヤ啓蒙主義者は〈ベルリン主義者〉と呼ばれたが、このことはドイツにおけるユダヤ啓蒙主義の性格を雄弁に物語っている。ベルリンは18世紀に急成長した新興の商工業都市であり、貴族の居ない新興ブルジョアジーの町であった。また国王の管轄下にある全ての文化機関は全てフランス人が運営し、フランス啓蒙主義の影響下にあったコスモポリタンの雰囲気のある都市でもあった。この地で、封建的ギルドの制約下になかったある意味で自由であったユダヤ人は、政府の重商主義政策の中心的担い手になり、経済力と法的待遇改善を獲得して行った。そして文化的には、人間の自由・平等を主張するフランス啓蒙主義の影響を受け、啓蒙の哲学に深くコミットして行き、ユダヤ啓蒙主義の花を育てて行ったのである。このことは、ユダヤ啓蒙主義の中心的担い手がユダヤ人富裕層と知識層であり、そして啓蒙主義の育つ社会環境は脱封建的な市民社会であることを示している。しかし、進歩と平等の建て前の下で推進された市民社会の形成は、新興支配層への価値の一元化とこれに同調しない者への差別と弾圧を背景にして行われ、排除か同化かを迫る政策によって推進されたことも確かである。ハイネが「ヨーロッパ文化へのパスポートはキリスト教への改宗である」と苦渋をもって語っているように、ユダヤ啓蒙主義者はドイツ社会の中に安定的地位を得るために改宗を行い、父母の言語であるイディッシュ語を軽蔑し捨てて行った。したがって、ドイツにおけるハスカラー運動には文化的・宗教的ニヒリズムの影が付きまとっていることは否めない。またオーストリア領のボヘミア、モラヴィア、ガリチアでは国家権力と結び付いたユダヤ啓蒙主義者によって上からの強制的なユダヤ人矯正(啓蒙)政策が進められ、無残な失敗に終わっている。

一方、構造的に西欧の〈辺境〉に組み込まれていたポーランドを中心とする東欧では、「再版農奴制」によって19世紀まで農奴制が残存した結果、封建制身分制が温存されて社会構成員が農民と地主という二大階層に固定化され、都市市民層の成長が阻害された。そこには、封建的「身分としてのユダヤ教徒」を建て前の上でも解放する社会的条件はなかったのである。また、18世紀後半から19世紀前半にかけては、西欧の中核諸国とロシアが中央集権的な国家形成を行い領土

拡張をしていった結果、東欧の諸国は周辺大国の支配下に置かれ、東欧の諸民族は民族滅亡の危機を感じて民族意識を燃え上がらせていた。ポーランド分割を当事者として経験したユダヤ民族もその例外ではなく、彼らも民族的危機を強く感じていた。この時期のポーランドユダヤ社会は、周囲への同化の可能性のない封建的身分社会の中であって、古いラビ体制の腐敗と權威の喪失、「領土」的分割の危機に直面していたと言える。ハシディズムは、まさにこのような状況の中で、ラビ体制の下で抑圧されていた無学なユダヤの民衆が生み出して行った独特の新しい形態のユダヤ教であり、西欧の〈辺境〉と言う与えられた条件の中でユダヤ教の「近代化」とユダヤナショナリズムを体現する民衆の宗教運動であったと考える。M. ブーバーがハシディズムを「アム・ハーレツ（地の民＝無知な人間）の反乱」と呼び、G. ショーレムが「ハシディズムの感情世界が、ユダヤ教の精神的革新に努力していた人々の精神を大きな力でひきよせた。……ハッシーディームの書のほうが、その合理主義的敵対者マスキーリーム（啓蒙主義者）の書よりもオリジナルな思想を豊かに包蔵している」と書いていることの意味はさらに多面的に究明される必要があるように思う。

参考・引用文献

- ・I. ウォーラーステイン『近代世界システム』Ⅰ・Ⅱ，川北稔訳，岩波書店，1981年。
- ・I. ウォーラーステイン『近代世界システム 1600～1750』，川北稔訳，名古屋大学出版会，1993年。
- ・羽場久澁子『統合ヨーロッパの民族問題』，講談社，1994年。
- ・湯浅赳男『ユダヤ民族経済史』新評論，1991年。
- ・I. ドイツチャー『非ユダヤ人的ユダヤ人』，鈴木一郎訳，岩波書店，1970年。
- ・徳永恂『ヴェニスへのゲートにて』，みすず書房，1997年。
- ・下村由一「アンティセミチズムとシオニズム」『マイノリティーと近代史』所収，下村由一，南塚信吾編，彩流社，1996年。
- ・K. マルクス『ユダヤ人問題によせて ―ヘーゲル法哲学批判序説』，城塚登訳，岩波書店，1989年。
- ・G. ショーレム『ユダヤ神秘主義』，山下肇他訳，法政大学出版局，1985年。
- ・D. バカン『ユダヤ神秘主義とフロイド』，岸田秀他訳，紀伊国屋書店，1976年。
- ・M. ブーバー『ハシディズム』，平石善司訳，みすず書房，1997年。
- ・J. ダン「ユダヤ神秘主義」，岩波講座東洋思想第二巻『ユダヤ思想2』所収，岩波書店，1988年。
- ・C. ロス『ユダヤ人の歴史』，長谷川真他訳，みすず書房，1966年。
- ・G. L. モッセ『ユダヤ人の〈ドイツ〉』，三宅昭良訳，講談社，1996年。
- ・S. キューニューヴィッチ『ポーランド史』1，加藤一夫，水島孝生訳，恒文社，1986年。
- ・山下 肇『ドイツ・ユダヤ精神史』，講談社，1995年。
- ・高尾千津子「ロシアのユダヤ人」，講座スラブの世界第2巻『スラブの民族』所収，弘文社，1995年。
- ・上田和夫『イディッシュ文化』，三省堂，1996年。
- ・上田和夫『ユダヤ人』，講談社，1986年。
- ・西 成彦『イディッシュ』，作品社，1995年。
- ・荒井章三，森田雄三郎『ユダヤ思想』，大阪書籍，1985年。
- ・黒川知文『ロシア社会とユダヤ人』，ヨルダン社，1996年。
- ・E. ヴァイグレル『啓蒙の都市周遊』，三島憲一，富田敦子訳，岩波書店，1997年。
- ・ENCYCLOPAEDIA JUDAICA JERUSALEM Vol. 7.
- ・THE SHORTER JEWISH ENCYCLOPAEDIA IN RUSSIAN（ロシア語）モスクワ，1996年。
- ・H. Лесков, Еврей в России, М., «Книга», 1990.

- С. Дубнов, Всеобщая История Еврейского Народа от древнейших времен до настоящего ; новейшая история : от французской революции 1789 года до мировой войны 1914 года, Берлин, «грани»,1923.